男性名詞単数与格語尾について

千葉崩一郎

Об окончании дательного падежа единственного числа
имен существительных мужского рода.

Хоитиро Тиба

本稿では，-Ŏ 語幹語形変化ならびに -Ŭ 語幹語形変化の相互作用の流れの中で，-Ŭ 語幹単数与格語尾 -ови の辿った道を，東スラブ語方言の中で明らかにしたいと思う。

Ф. П. Филин によれば，語尾 -ови, -еви は既に古代スラブ語文献，特に Супрасльская рукопись に，固有名詞及び人を現わす名称において -у, -ю の現れる個所に屢々見出されるという，Петрови, богови, господеви, мѫжеви. 語尾 -ови, -еви の拡大の時期は極めて早く，共通スラブ語期の現象と推定されるが，その辿った道は一様ではなく，ある方言においては完全に失われたものの，他の方言においては一層の拡大を見せているのに気付く。例えば，現代南方スラブ語方言においては，語尾 -ови, -еви は失われてしまっているが，西スラブ語方言においては幅広い拡大を見せている。ポーランド語にあっては 1 音節及び若干の 2 音節の語において通常 -u 語尾をとるが，bratu, panu, ojcu, chłopu, それ以外のすべての名詞においては活動体不活動体を問わず語尾 -ovi が支配的である。又チェッコ語においては人を意味する語を除き語尾 -u をとるが，語尾 -ovi も又用いられる，věku 及び věkovi. 動物を意味する名詞の場合は語尾 -u も標準的であるが，生物の名称においては語尾 -ovi をとるのが普通である。東スラブ語方言においては語尾 -ови, -еви の辿った道は，頗る複雑な様相を呈している。

語尾 -ови, -еви は古文献において主として人称名詞，固有人称名詞に現れている。Н. А. Соколова の引用例によると Остромирово евангелие においては богови, доухови, авраамови. Изборник Святослава 1073 г. には богови, Петрови, мѡусеови. Слово о полку Игореве には полечю рече зегзицею по дунаеви, пѣти было пѣсь Игореви, Игореви князю богъ путь кажетъ: млъвитъ Гзакъ Кончакови. Мстиславова грамота 約 1130 年においては отдати боуицъ с҃тмоу Георгиеви. П. Я. Черных の引用例によると Архангельское евангелие において богови, мужеви, кесареви, Петрови, Иосифови. Новгородская грамота 1264 г. には Иванкови が現れている。勿論語尾 -ови, -еви は，古来の形態 -у, -ю と平行して共存していた。例えば Слово о полку Игореве において затворивъ дунаю ворота, князю Игорю не быть, пѣти слава Игорю, не мало ти величія, а кончаку нелюбія. 語尾 -ови は一定のグループの語に定着し安定している。Домострой に жена добра вѣнецъ есть мужеви своему, со страхом богови молитися, коль мерско господеви наш смрад и обоняние とあるが，前例の場合語尾 -ови は -i 語幹名詞 господь に滲透している。古文献における語尾 -ови の使用例は，文体的であると見做される。それは使用されているテキストによっても，又語尾 -ови を持つ語彙によっても推定されよう，богъ, господь, мужь. 以上の事が曾て П. А. Лавровский に，古代ロシア語文献における語尾

-ови, -еви の使用は完全に文語的であり，古代スラブ語テキストからの借用であって，古代ロシアの民衆語には存在していなかったと言わせたのであったろうが，勿論この推定は正しくはなかった。

И. В. Ягич は，古代ロシア語期における語尾 -ови, -еви の方言的拡大の問題に触れ，この形態が現代大ロシア語方言に存在せず，南方及び西南方に固有であることに関連して次のように疑問を投げかけている。それは，古代標準ロシア語が，南方及び北方のすべての文献に -ови, -еви 形態の著るしい拡大を見せたのは，ロシア語，スラブ語文献が南方において生み出されたことに起因するのではあるまいか，換言すれば，古代ロシア語における -ови, -еви 形態は，南方ロシア語方言の特徴をなすものではないのか，としている。

この問題に関し A. A. Шахматов は大要次のように述べている。語尾 -ови, -еви は北方，南方を問わず古代ロシア語において，固有名詞ならびにそれ以外の多数の名詞に数多く見出される。ところが現代大ロシア語においては，それは全く知られていない。しかしながら古文献は，古代ロシア語がそれを知っていたことを実証している。Новгородские летописи, Суздальские летописи あるいは Двинские акты においては，南方ロシア語文語の影響の下で -ови 形態を使用したと考える根拠はない。-Ŭ 語幹単数与格尾 -ови は，遙か遠い過去の時代に -Ŏ 語幹に移行したものと考えられる，としている。更に A. A. Шахматов は，語尾 -ови は北方，東北方においては比較的遅く，ロシア語形成過程において消滅したと考えて続ける。南方ロシア語方言の古文献においても語尾 -ови は，著るしく活動体名詞に優勢である。白ロシア語において語尾 -ови は，現在専ら活動体名詞においてのみ使用されている。この事実は，ロシア語の全域において語尾 -ови の活動体名詞への拡大は共通の現象であったこと，不活動体名詞に -ови が滲透して行ったのは幅広い拡大を見せたウクライナ語を除いては特別の場合であったと言える。ウクライナ語における語尾 -ови の拡大は，その不活動体名詞が活動体名詞の他の語尾，例えば単数対格において，語尾 -a をとったことに係わりがあるように見える，としている。A. A. Шахматов は，共通スラブ語期に何故語尾 -ови が活動体名詞と連合したかについて次のような見解を述べている。周知のように -Ŏ 語幹は，-Ŭ 語幹から単数生格語尾 -у を単数位格語尾 -у を借用した。如れの語尾も最初は不活動体名詞にのみ移行した。その結果生格語尾 -у と位格語尾 -у は，-Ŏ 語幹不活動体名詞単数与格語尾 -у と密接な，恒久的連合関係を結ぶようになった。固定アクセントを持つ多くの語においては，すべて三つの格は同形となった。例えば торжку は，位格，生格，与格が同形である。移動アクセントを持つ語においては，位格の形態は生格，与格の形態とアクセントの位置によってのみ異なった。вéрху は生格及び与格で，верхý は位格である。このようにして取り残された -Ŭ 語幹与格語尾 -ови は，もはやこれ等の語形変化の古い語尾（生格及び位格の -у）と連合することはなかった。それは男性名詞変化の他の語尾，即ち，単数生格語尾 -а, 単数位格語尾 -ѣ と連合するのが極く自然であったのは明白である。初め -Ŭ 語幹に滲透した -Ŏ 語幹単数生格語尾 -а は，сына, вола の活動体名詞においてのみであった。これ等の事実は既に共通スラブ語期に生じた。以上の結果，語尾 -ови と活動体名詞としてのこれ等の語との結合が強められた。単数生格 мéду, 単数位格 медý の場合，単数与格 мéду が生じたのは極く自然であった（比較：-Ŏ 語幹における сóку, сокý, сóку）. медови は сокови が知られていなかったように消滅してしまった。それとは反対に単数生格 сына の場合に сынови が存在を続け，これが他の活動体名詞に拡大して行った。しかしながら南方及び西方においてかなり早い時期に，語尾 -ови は不活動体においても使用されるようになった。例えば Галицко-Волынская

летопись における к Санови, к Донови, по ручаеви, к боеви である。このような現象は北方には見られなかった。

以上が A. A. Шахматов による語尾 -ови の，基本的な意味を獲得するメカニズムの説明であるが，Ф. П. Филин はこれを評して人為的であるとして，この A. A. Шахматов の説を否定している。何故ならば，単数生格・位格語尾 -у 及び与格語尾 -ови の -Ŏ 語幹への滲透は同時に生じた，単数生格語尾 -а，単数位格語尾 -ѣ は，活動体のみならず不活動体にも使用された，不活動体名詞は語尾 -ови, -еви もとり得る，としている。

A. A. Шахматов の後，この問題に関し多くの業績が発表された。殆んどすべての研究者は，古代ロシア語文献の初期に，語尾 -ови, -еви が北方を含めての東スラブ語の全域に拡大した事実を認めている。それと共にこの形態の使用度数が，北方と南方とでは一様でない事実も又確認された。それは南方ロシア語文献において，語尾 -ови が極わめて屢々見られるのに，北方ならびに東方ロシア語文献においてはこれに反して，使用例が極わめて限定されており，14 世紀になると全く消滅してしまっていることであった。-Ŭ 語幹単数生格語尾 -ови, 複数主格語尾 -ове 等が広く拡大しているのは西南部における古文献，特に Ипатьевская летопись の Волынская часть においてであり，-Ŭ 語幹の古い形態の痕跡が数多く見出されるのは西部の文献においてであること，つまり白ロシア語が形成された地域における文献においてであった。

И. Х. Тот によれば，古代ノヴゴロド方言と南方及び西南方方言との著るしい相違点は，男性名詞単数与格において語尾 -ови, -еви を欠いていることである，としている。彼は古文献における語尾 -ови, -еви 使用例を文語の影響の所産であると見ているが，Ф. П. Филин はこの見解に同意を表していない。Ф. П. Филин はノヴゴロドの白樺表皮に残された記録について，興味ある調査報告を寄せている。その記録は地方色豊かな文中に，語尾 -у, -ю と並んで語尾 -ови, -еви が具体的な人名に対して使用されており，この場合何等明白な文体的ニューアンスは認められない，としている。これ等の資料はその中で，人名の与格形が屢々使用されているため極わめて示唆的である。語尾 -у, -ю と -ови, -еви との相互関係は，たとえバリアント -ови, -еви 形態が古代ノヴゴロド人の話し言葉に無縁ではないにしても，使用例は稀であり，これが後になって消滅を招いたことを示している。

Ф. П. Филин の試算によると，人名与格 -у, -ю 形態 119 例に対して -ови, -еви 形態は僅か 9 例で，全体の 7％を占めているにすぎない。即ち，1. ѿ Жировита къ Стоѧнови (11 世紀前半，古代ロシア語文献における -ови 形態最古の例)。2. от Гостяты к Васильви (11 世紀)。3. посъли къ тому моужеви грамотоу (11 世紀)。4. ѿ Петра грамота къ Влътькови. То еси ты повѣдалъ къ Рожънѣтови (11 世紀—12 世紀)。5. а водаи Михалеви (12 世紀)。6. ѿ Михалѧ к атцеви (13 世紀)。7. а что обилие … митрови (＝Дмитрови) (14 世紀)。8. Науму Соленови (14 世紀)。更に Ф. П. Филин はこれ等の資料をキエフ София の гаффито と比較して，頗る興味深い結論を導いている。即ち，これ等の гаффито においては，男性の人名与格 22 例中半分の 11 例が -ови, -еви を，残りの半分の 11 例が -у を保持している，Ставърови, Иванъви, Геѡргиеви, Васильви, Григореви, попови, Съмеоновъ[и], Фсъыпорови (12 世紀)，Лазореви забойнику (13 世紀—14 世紀)，Борисови (年代不詳)，Павълови (年代不詳)，及び Георъги[ю] (ここでは Георгиеви も可能で問題がある)，Михаилу, Меркурию, Иоанѹ, Петру, Феодулоу, Ивану (2 回)，Никону, Феогностѹ. これ等の人名の殆んどすべては，Господи, помози рабу своему… の

定式に見出されたものであった。しかし北方においては，これ等の定式の中では通常語尾 -у, -ю が認められる，гѝ помози рабу своему Онѳиму (12 世紀—13 世紀) гѝ помози рабу своему Борису (12 世紀—13 世紀)，гѝ помози рабу своему Антону (1238 年)，гѝ помози рабꙋ своемоу Костѧньтинꙋ (12 世紀)，гѝ помози рабоу своѥмꙋ Лазорю (1161 年)，гѝ помози рабоу своѥму Василию в крщениі именемъ Рогволоду (1171 年)，Михаиле помози рабꙋ своемꙋ Ѳеѡдорꙋ (12 世紀—13 世紀)，гѝ помъзи дому великъму (12 世紀)，гѝ помози рабоу своѥмоу Кюрилоу (1279 年)。唯 Тверь 出土のものと思われる14世紀の蛇紋石碑銘に гѝ помози рабоу своѥмоу Андрѣѥви とあるのみであった。

以来 -ови, -еви 形態は北方においては消滅の一途を辿るが，稀には文語的文体をもって古文献に留まる場合も見られた。Б. В. Куликов は，1380 年から 1505 年にかけての東北部に係わる古文献 250 部以上を調査した結果，これ等の文献には専ら語尾 -у, -ю が使用されていることを報じている。

1479 年モスクワ年代記集成の 16 世紀 Уваровский список を研究した Т. А. Якубайтис は，11 世紀—12 世紀の記録には -ови, -еви 形態を持つ語が 128 例あり，それが 13 世紀の記録には 37 例，14 世紀は 8 例，15 世紀は僅か 2 例に減少していると，興味ある数字を示している。С. И. Котков は，17 世紀の南方大ロシア語方言には，1 例の -ови, -еви 形態も見当らない，と報じている。

14 世紀から 17 世紀に到るロシア語古文献に，-ови, -еви 形態が認められる場合は，文語的文体によることが多かった。-ови, -еви 形態は，専ら бог, дом, господь, муж, змий, царь に現れて，教会的，文語的文体の著作の中で使用されている。従って，既に 16 世紀後半において，この形態は死滅していると言ってよい。14 世紀から 16 世紀にかけて，東スラブ語方言の北方においては，男性単数与格語尾は -у, -ю 形態のみを残して，曾て副次的なバリアント -ови, -еви は完全にその姿を没してしまった。-ови, -еви の等高線は徐々に南方に下がって行き，やがて白ロシアの地域を捉えて行く。西方ロシア語の古文献は，隣接するウクライナ方言，ポーランド語の影響により語尾 -ови, -еви を知っていたのかも知れない。白ロシア語においては語尾 -ови, -еви は，ロシア語におけるよりも長く留まった。А. А. Щахматов によると語尾 -ови, -еви は，ウクライナ語のみならず白ロシア語においても固有であるとしているが，Е. Ф. Карский はそれを白ロシアの西南寄り，ポーランド語とウクライナ語に隣接する方言の中でのみ知られている，と述べている。この形態の等高線は，ポーランドの国境から Пружаны, Дрогичин, Иваново を経て東南に伸び，Пинск の東方でいきなりウクライナの国境を目指して南下している。

北ロシア語方言においては，多くの学者が考えているように，-Ŭ 語幹単数生格語尾の痕跡を留めている副詞，домой, долой の 2 語のみが，何故かとり残されて今日に到っている。

東スラブ語方言の南部においては，語尾 -ови, -еви の辿った道は北部のそれとは異なるものがあった。前述のように初期の南方ロシア語文献において，この形態は極めて優勢であった。14 世紀—15 世紀の молдавские грамоты において，-ови, -еви 形態が活動体名詞に多く見られたのは当然であるが，不活動体名詞においても又時折見受けられる。この形態は通常固有名詞の借用語においても使用されているので，幅広く使用されていたことは明らかである，Аж-Гериеви, Тъутулови, Станчулови, Олъбрахътови. А. А. Шахмаов は，南方ロ

シア語方言において積極的に活動体名詞に現れた，-ови, -еви 形態の例を次のようにあげている。Повесть временных лет по Лаврентьевскому списку において Воробьеви, Борисови, Василкови, Володареви, Коневи, Рюрикови, мужеви, Глебови, Игореви, д(у)хови, Ꙗневи しかし Дунаеви, манастъреви, ѡгневи, боєви. Летопись по Ипатьевскому списку において попови, Глѣбови, к вепреви, к медвѣдеве, Петрови, зятеви, королеви, тьстеви, ко Александрови, ко строєви, оуєви, Павлови, коневи しかし不活動体では河や都市の名称において к Санови, Рутови, к Въреви, Холмови, к Донови, -jŎ 語幹のある種の名詞において по ручаеви, к боеви, зноеви, ѡгневи, манастъреви, 若干の語において по валови, по ледови, по лугови, к валови, ко ѡсѣкови, соньмови. Слово о полку Игореве においては固有名詞のみ красному Романови, Игореви, Хинови, великому Хръсови, по Дунаеви, Кончакови. Книги законные по списку XVв. において волкови, звѣреви, моужеви, ѡсподареви, ц(а)реві しかし ѡгневи, по грошеви. Перемышльская грамота 1378 г. において Иванови, Ивашкови, Ходорови, зятеви, протодьяконови しかし монастъреви. Перемышльская грамота 1391 г. において Яшкови しかし к тому листови. Галицкая грамота 1401 г. において Кундратови, Васковѣ. Молдавская грамота 1433 г. において Стефановѣ. Молдавская гамота 1434 г. において Казъмирови, Владиславови.

14 世紀 15 世紀のウクライナの古文献において，別のバリアント -овѣ, -евѣ が姿を見せた。尤も A. E. Крымский によるとこの形態は案外に早く，既に 1076 年 Изборник に д҃хвѣ の形で現れている，と述べている。-овѣ, -евѣ 形態の成立については，женѣ, землѣ, конѣ 等における語尾 -ѣ の類推説，物主形容詞双数主格・対格と男性名詞単数与格との混同説，例えば далъ свою рѣчь Васковѣ роуцѣ を Васковѣ в роуцѣ（名詞），в Васковѣ руцѣ（物主形容詞）と二様に受取ることができることであるが，しかし Ф. П. Филин は -Ŏ 語幹硬変化位格語尾 -ѣ の与格への移行として捉えている。ともあれ，-овѣ, -евѣ の出現は，類推の結果であることは間違いのない事実である。語尾 -овѣ>ові, -евѣ>еві ならびに -ови, -еви は，東スラブ語方言の中でウクライナ語を，截然と区別する特徴である。旧い語尾 -ови, -еви は，主として西南方言に保持されているものの，これと共に他の形態も使用されているという。例えば，外カルパチヤ方言においては語尾 -ови, -ові, -оі（<ові), -у が見られるし，ドニエストル右岸の Ройлянки 村においては，通常使用されるのは -ови であるが，然し -ові 形態も又知られている。この -ові 形態（表記では -овѣ）は，16 世紀—17 世紀の войтовские книги に認められている，Фе доровѣ, Лукачовѣ, Василовѣ. 従ってこの語尾は，以前から西南部に存在していたものであって，近代に到って標準語によりもたらされたものではない。ウクライナにおける語尾 -ови, -овѣ の -у, -ю に対しての優勢は，東から西へ，北から南に向って強まっていると言ってよい。

現代標準ウクライナ語においては，語尾 -ові の文体的限定が認められる。この形態は詩，散文においてのみ活動体に積極的に保持されている。実務用語においては特に戦後明らかに，使用が狭まれていく傾向にあるが，その代りこの形態は集合名詞，抽象名詞，形態的に同音意義語を区別するための拡大が見られる。

最後に，現代ロシア語で旧い形態 -ови の痕跡を留めている домой, долой の二語について簡単に触れ，この稿を終えたいと思う。

ウクライナ語及び白ロシア語においては，домой, долой の形態は存在せず，домовь,

доловь がこれに対応して使用されている。П. Я. Черных によると домъ の単数与格形 домови は，初め Повесть временных лет по Лаврентьевскому списку の中に見出されるという，идѣте с данью домови. この場合の単数与格形 -ови は，運動の目的を示している。それは同じ Повесть временных лет の中の Ольгъ бѣжа Тмутороканю, Мстислав же възвративъся вспять Суздалю, Ольга приде Царюгороду における -у, -ю と全く同一である。これよりやや遅れて домови>домовь の形態が，それぞれ次の文献に認められる。Новгородская летопись по Синодальному списку において отпусти я домовь. Смоленская грамота 1230 г. において понесеть его домовь. 17 世紀にはモスクワにおいて домовь 又は домов 形態が標準的であった。例えば Уложение 1649 г. において збѣжит к себѣ домовь. Котошихин の О России において отпустить его к себе домовь. П. Я. Черных は，恐らく他の方言において生じたと見られる домо[в]и, домои>домой が，Петр 時代の頃 домовь を圧迫したと見ている。долови についても当初の意味は прочь, вниз であり，この意味で未だ 17 世紀の頃まで使用されていたとして Сказание о самозванце の中の次の例をあげている，убиша тамо же вверху и скинуша его доловь на землю.

古代ロシア語において使用されている домовь, доловь 形態が，現在においても存在していることは，多くの学者が推定しているように домови, долови>домовь, доловь>домой, долой の過程は当然頷かれよう。然るに Е. Ф. Карский はこれに対して，домой, долой は大ロシア語にのみ見られる形態で，これによく似たロージッツ語の domoj, doloj は，домовь, доловь に対応するものである。домовь, доловь>домой, долой が成立すれば в>й が仮定されようが，このような交替は大ロシア語にはあり得ない等，幾つかの論拠をあげて疑問を投げている。然しながら，домой, долой 成立の過程を詳らかに跡づけることはできなくとも，前述の外カルパチヤ方言において，語尾 -ови, -ові, -оі, -у がそれぞれ平行して現われている事実は，これ等の間に内的関連を予想させるのに充分である。

参　考　文　献

Карский Е. Ф. Труды по белорусскому и другим славянским языкам. М., Изд-во АН СССР, 1962.

Кондрашов Н. А. Славянские языки. М., "Учпедгиз", 1956.

Соколова М. А. Очерки по исторической грамматике русского языка. Л., Изд-во ЛГУ, 1962.

Филин Ф. П. Происхождение русского, украинского и белорусского языков. Л., "Наука", 1972.

Черных П. Я. Историческая грамматика русского языка. М., "Учпедгиз", 1954.

Шахматов А. А. Историческая морфология русского языка. М., "Учпедгиз", 1957.